

ヨシフ・ブロツキイ博物館の開館に向けて

竹内 恵子

はじめに

ノーベル賞詩人ヨシフ・ブロツキイ (Иосиф Александрович Бродский / Joseph Brodsky) が 1996 年に 55 歳で急逝してから四半世紀近く、故郷サンクトペテルブルグ (旧レニングラード) によろやく彼の個人博物館が開館する運びになった。¹ 開館予定日は 2020 年 5 月 24 日で、ブロツキイの生誕 80 周年にあたる。

親友ミハイル・ミリチクの構想から半世紀²、ミリチクが代表を務める「ヨシフ・ブロツキイ博物館創設基金 Фонд создания музея Иосифа Бродского」の設立から 20 年が経過しようとしている。一時は頓挫したかにみえた博物館計画が、なぜ急速に進展したのか。この小論ではこれまでの紆余曲折を解き明かすと共に、新博物館の名称等についても紹介したい。なお、長年にわたって「基金」を支援してきた「アンナ・アフマートワ博物館 Музей Анны Ахматовой」との関係については別稿で述べたので³、併せてお読み頂ければ幸甚である。

1. ムルジ邸について

今回ブロツキイ博物館が予定されているのは、リテイヌイ大通り (Литейный проспект) とペステリ通り (улица Пестеля) が交差するところに建つ「ムルジ邸 Дом Мурузи」だが、詩人ブロツキイはここで出生したわけではない。⁴

詩人の父アレクサンドル (1903 年レニングラード生まれ) は、市の南部 (ナルヴァ

¹ この小論に記載された内容は 2019 年 6 月現在のものであることをお断りしておく。なお、ペテルブルグの芸術広場には「ブロツキイ博物館 Музей-квартира И.И.Бродского」があるが、これは画家イサーク・ブロツキイ (Исаак Израилевич Бродский) のもので、彼は詩人ブロツキイとは親戚関係にはないので、混同しないよう注意されたい。

² Михаил Исаевич Мильчик (1934 年レニングラード生まれ) は建築史家で文化財保護の専門家でもある。1962 年秋にブロツキイと知り合い、終生の友となる。

³ 竹内恵子「ヨシフ・ブロツキイ研究の現在——ロシア編——」『SLAVISTIKA』第 32 号、2016 年、281-300 頁。

⁴ Полухина В. Иосиф Бродский: Жизнь, труды, эпоха. СПб., 2008. С. 11-14. ちなみに 1940 年に詩人が出生したのはペトログラード地区にある産院だが、まもなくレニングラード封鎖を避けてヴォログダ州チェレボヴェツに疎開した。

門付近の地区)にあるオブヴォードヌイ運河沿いのアパートに居住していた。一方、母マリヤ(1905年ラトビア生まれ)は第一次世界大戦後にレニングラードに移住し、ルイレーエフ通り(улица Рылсеева)のアパートに住んでいた。疎開先から戻った幼少期のブロツキイは、この2つのアパートを行き来して育った。

ブロツキイの両親はこの2つのアパートの居住権と引き換えにして、一家3人で(ヨシフは一人息子だった)この「ムルジ邸」へと転居したのである。時は1955年、ブロツキイは15歳だった。それから国外追放になる1972年までの約17年の大部分を、詩人はここで暮らすことになる。

アパート2つ分を犠牲にただけあって、入居した「ムルジ邸」は、華麗な建築物の並ぶペテルブルグ中心部においても、ひときわ豪壮なものだった。後年ブロツキイは誇らしげにこう回想している。

これは北ヨーロッパで世紀末から今世紀の初頭に流行った、いわゆるムーア式のたいへん贅沢な建物の一つだった。建てられたのは1903年、つまり私の父の生れた年で、この時期のペテルブルグの建築上のセンセーションだった。アフマートヴァが私に話してくれたところによれば、彼女は両親に連れられて馬車でこの驚異の建物を見にきたことがあるという。ロシア文学史上もっとも有名な通りの一つであるリテイヌイ大通りに面した、その建物の西側には、アレクサンドル・ブロークが住んでいたこともある。⁵

もっとも、文中の「1903年建造」というのはブロツキイの勘違いである。

ムルジ邸が建てられたのは1874~1877年(1876年完成説もある)とされており、家主はアレクサンドル・ムルジ公爵である。⁶公爵の父ドミトリイ(ドミトリイの父親はモルダヴィア公国を管轄する代官職にあった)は、オスマントルコ軍に勤務するビザンティン系ギリシア人で、代々ギリシア正教の聖職者を輩出する名門一族の出身だった。露土戦争の際ドミトリイはロシア帝国側に、トルコにとって不利な情報を漏洩した。裏切りを察知したトルコ政府はドミトリイを処刑し、未亡人と2人の息子(アレクサンドルとグリゴリー)はロシアへ亡命したのである。⁷

「ムルジ邸」はペテルブルグで最初の「賃貸住宅 доходный дом」(家主の居住スペースの他に、借家人が住む部屋や店舗などが入っている住宅)の一つだった。建物が「ムー

⁵ 沼野充義『モスクワ——ペテルブルグ縦横記』岩波書店、1995年、47頁。

⁶ Царев Р. Санкт-Петербург. Необычные прогулки, которые перевернут ваше представление о северной столице. М., 2013. С. 204-208. その他複数の文献で確認した。

⁷ Там же. なお、引用図書の文中にある露土戦争がいつの時代のものを指すかは不明である。

ア様式」で優雅に装飾されているのはおそらく、公爵家の出身地である南方（ギリシア、トルコ、モルダヴィア）への連想をかきたてると共に、エキゾチックな意匠によって人目を引き入居希望者を増やす意図があったものと思われる。また、ギリシア人のムルジ公爵がこの立地を選択したのは、近くにスパツ＝プレオブラジェンスキ大聖堂（Спасо-Преображенский собор）が建っているせいかもしれない。堂内の柵には黒海沿岸のトルコ軍要塞から奪取した大砲が飾られている。つまりこの大聖堂は、イスラム教に対するキリスト教（東方正教会）の勝利を象徴しているという点で、まさにムルジ公爵の心境を代弁しているかのような教会だからである。⁸

いずれにせよ、この邸宅は市中で評判を呼び、竣工直後の1879～1880年には作家ニコライ・レスコフが早速部屋を借りて住んでいたという。「銀の時代」にも、ブロツキが言及したブロックだけでなく、1889～1913年にはメレシコフスキとギッピウス夫妻が居住していたことで知られている。また同時期には詩人ウラジーミル・ピヤストが邸内で「詩人ギルド Цех поэтов」の会合を開いていたとされ、革命後の1920年代初頭にはニコライ・グミリョフの発案により「ペトログラード詩人の家 Петроградский Дом поэтов」が設置された。

このように巷間では有名かつ美しい建物なのだから、「ムルジ邸」に住むチャンスをブロツキの両親が見逃すはずはない（母マリヤは住宅管理事務所に勤務しており、住宅情報にいち早くアクセスできる立場にあった）。実は、母マリヤのアパートがあった「ルイレーエフ通り」はすぐ近隣にあり（したがって、スパツ＝プレオブラジェンスキ大聖堂の庭は子供時代のブロツキにとって格好の遊び場でもあった）、引越すのも容易だったのだ。憧れの「ムルジ邸」の住人となった1955年から2年後、学校を中退した17歳のブロツキは詩作を始める。このように、ブロツキにとっての「ムルジ邸」とは、詩人というキャリアとあまりにも深く結びついた場所なのである。

2. 「一部屋半」

ソ連時代になってからの「ムルジ邸」は外観こそ豪華な貴族の館ではあったが、中はキッチン、トイレ、バスルーム等をシェアするいわゆる「共同住宅^{コムナルカ}」だった。ただし、それでもブロツキ一家は幸運だったと詩人は回想している。一家が所属しているコムナルカは全6部屋で構成され、ブロツキ家3人を含めて住民は全部で11人しかいなかったからだ（ブロツキによれば、コムナルカは平均して25～50人の住人

⁸ リシャット・ムラギルディン『ロシア建築案内』TOTO出版、2002年、179頁。

で構成されることが多く、条件が悪ければ100人に達することもあるという)。⁹

また、ソ連の法律によれば一人当たりの居住面積は9㎡であり、3人家族なら27㎡しか支給されない。しかし、既述したように両親がアパート2つ分の居住権を手放したことで、また住宅の構造上の欠陥（いわゆる「アンフィラード」で、ドアの部分が一直線に配置されつながっていく構造）のため、ブロツキ家に支給された「一部屋半」は40㎡もあり、13㎡もの余裕があった。したがって、こぢんまりしたコムナルカでも比較的ゆったりと暮らせたのである。¹⁰

もっとも、利点づくめだったわけではない。間取りは「一部屋半（英語では a room and a half, ロシア語では полторы комнаты）」というなんとも中途半端なものでしかなかった。「一部屋」の方は居間でもあり客間でもあり、日常の食事をするダイニングルームともなり、夜には両親の寝室ともなった。この部屋の中心的存在は、結婚前の1935年に母親が買ったという優美なベッドだった。このベッドは単なる寝具ではなく、家族が読書したり雑談したりする憩いの場でもあったという。¹¹ したがって両親の死後に、既にアメリカにいたブロツキイはなんとかしてこのベッドだけでも相続しようとしたのだが、入手することはできなかった。¹²

一方、残りの「半」部屋にあたる方が、息子のブロツキイが占有していたスペースだった。問題は、両親の「一部屋」から完全に隔離されていないため、プライバシーが保てないということである。このプライバシーの確保こそ、15歳という思春期に「ムルジ邸」に転居してきたブロツキイの、その後の最重要課題となる。なにしろ、両親の部屋と自分の半部屋との境界をレンガなりベニヤ板なりで完全に遮断してしまうのは不可能なのだ（法律上は「一部屋半」として居住登録しているため、独立した「二部屋」に住んでいると見なされると違反となり、隣人などによって当局に通報されてしまう）。¹³ そのため、ブロツキイはありとあらゆる奇想天外な方法を駆使し（一時は巨大な水槽を設置しようと画策したほどだ）、自らの私的空間を構築しようと躍起になった。スーツケースと本棚を組み合わせ壁を作り、友人や恋人との会話を聞かれまいと、レコードプレーヤーで常に音楽をかけ続けたりもしたという。

このように、保護者の干渉を避けて芸術（書物やレコード）の力によって「個」の空間を確立しようとする若きブロツキイの苦闘ぶりは、特筆に値する。すなわち、両

⁹ Joseph Brodsky, *Less Than One* (London: Penguin Books, 1986), pp. 490-491.

¹⁰ *Ibid.*, pp. 452-454.

¹¹ *Ibid.*, pp. 473-474.

¹² Кельмович М. Иосиф Бродский и его семья. М., 2015. С. 127.

¹³ Joseph Brodsky, *Less Than One*, pp. 474-476.

親の存在とは公権力をふるって国民を監視する「国家」のメタファーでもあり、それに抗して「一個人」としての生活を確立しようとするブロッキの姿は、「詩人＝私人」を貫こうとする彼のその後の生涯を暗示するものでもある。エッセイ「一部屋半にて (In a Room and a Half)」は全 45 編の断章で構成されているが、執筆時に作者ブロッキ自身が 45 歳 (1985 年) だったことを考え合わせると、「一部屋半」こそが自己の原点だったとブロッキが捉えていた証しとも言えるのではないだろうか。

3. 博物館創設

「ムルジ邸」にブロッキの個人博物館を開設しようと発案したのは、前述したように、同世代の友人だったミハイル・ミリチクである。時は 1972 年 6 月 4 日、国外追放処分を受けたブロッキを空港まで見送りに行った帰途、ミリチクは車中でこのアイデアを思いついたのだという。¹⁴

ミリチクは再度「一部屋半」に戻り、当日のブロッキ家の光景をくまなく撮影し、詳細に記録に残した。¹⁵ 詩人が置いて行った家の鍵一式、小銭、煙草の吸殻が入った灰皿、そして書き机および書棚数架などである。¹⁶ 蔵書については、タチアナ・ニコリスカヤがリストを作成し、¹⁷ リテイヌイ大通りの隣のモホヴァヤ通りに住んでいたヤコフ・ゴルジンが、ブロッキの両親の死後に蔵書を自宅に引き取って保管につとめてきた。¹⁸

そして別稿で既に述べた通り、¹⁹ ソ連崩壊後の 1999 年にミリチクとゴルジンが中心となって「基金」を創設し博物館創設に取り掛かったのだが、今度はそこに不動産価格の高騰という問題が持ち上がったのである。²⁰ 特に、かつてのコムナルカを形成し

¹⁴ Хорошилова О., Пестова К. Квадратный вопрос // Огонек. 2006. № 49. С. 50.

¹⁵ ソ連に残されたブロッキの両親は、母マリヤが 1983 年、父アレクサンドルが 1984 年に亡くなるまで、「一部屋半」に住み続けた。

¹⁶ Мильчик М. (сост.) Санкт-Петербургский фонд создания музея Иосифа Бродского: «Полторы комнаты» Иосифа Бродского в фотографиях. Каталог выставки. СПб., 2017.

¹⁷ Татьяна Львовна Никольская (1945 年レニングラード生まれ～) はロシアおよびグルジア・アヴァンギャルド研究者で、1950 年代のモスクワで非公式詩人として活動したレオニード・チェルトコフ (Леонид Натанович Чертков) の伴侶だった時期もあった。現在、回想記作家として活動している。

¹⁸ Яков Аркадьевич Гордин (1935 年レニングラード生まれ～) はロシアの歴史家・作家で、軍隊を除隊した 1957 年にブロッキと知り合い親交を深めた (ゴルジンは元々詩人として活動していた)。1992 年より、ペテルブルグの文芸誌『星 Звезда』の編集長を務めている。

¹⁹ 竹内恵子「ヨシフ・ブロッキ研究の現在——ロシア編——」, 291 頁。

²⁰ Хорошилова О., Пестова К. Квадратный вопрос. С. 50-51.

ていた6部屋の住人のうち、1939年生まれで身寄りのない高齢女性が断固として立ち退きを拒否し、博物館計画は暗礁に乗り上げていた（この高齢女性が玄関に通じる表階段を使用する権利を持っていたため、消防法の規定により、彼女が「基金」に部屋を売却しない限り、市当局は博物館開館を許可しなかったのだ）。

膠着していた事態が大きく動いたのは、2017年夏である。ペテルブルグの新興不動産開発業者フォート・グループ (Fort Group) の総裁マクシム・レフチェンコが突如「基金」のスポンサーに名乗りをあげたのだ。²¹

選挙期間中に偶然、ブロッキ博物館計画が行き詰まっていることを耳にしたレフチェンコは、2017年7月にネットニュースサイト「フォンタンカ・ルー Фонтанка.ру」に「ペテルブルグ的な袋小路 Петербургский тупик」と題するコラムを発表した。²² このコラムを契機として、彼は「基金」を主宰するミリチクと知己になる。その後、レフチェンコはアフマトワ博物館との協働作業によりネット上にヴァーチャル博物館「ブロッキ・オンライン Бродский.Онлайн」(<http://brodsky.online/>)を立ち上げた（数日おきに更新されている）。更に、高額な立ち退き料を要求するコムナルカの住人にしかるべき金銭を支払い、2019年1月にようやく例の高齢女性が「ムルジ邸」を退去したというわけである。

こうして、2019年1月29日（ブロッキ没後23年目の翌日）にレフチェンコは、「基金」の長年の協力者でもあるアフマトワ博物館において、ブロッキ博物館をレフチェンコの「私設博物館」として開館する予定であることを発表した。なお、新博物館の名称は「The Room and a Half of Joseph Brodsky Museum」という英語名称になり、ロゴマークは「1½」という数字をデザイン化したものになる模様だ。「ムルジ邸」は建設から140年以上経って老朽化しているため、現在急ピッチで改修中だとのことである。

4. 結びにかえて

本邦で初めてブロッキの「一部屋半」について現地で取材したのは、沼野充義（1995年のエッセイ「地上でいちばん美しい街の詩人」）だと思われる。²³ 沼野の紹

²¹ Максим Борисович Левченко（1978年レニングラード生まれ）はサンクトペテルブルグ大学法学部で海運法を学び英国に留学、帰国後の2009年に不動産開発業者として起業した。2016年サンクトペテルブルグ市議会議員選挙にロシア自由民主党（ЛДПР）から立候補したが落選した。現在、同市の富豪の一人として知られる。

²² [<https://www.fontanka.ru/2017/07/07/119/>]（2019年8月10日閲覧）

²³ 沼野充義『モスクワ——ペテルブルグ縦横記』、25-48頁。

介から 25 年、ブロツキイ博物館は思いがけなく、実業家が手がける文化複合施設（従来の展示方式にこだわることなく、カフェや講義室も併設したイベントスペース）として開館することになった。

レフチェンコは「自分はブロツキイの大ファンとまではいけない」と認めている。あくまでビジネスを優先するレフチェンコの思い描くブロツキイ博物館が一体どのようなものになるのか、いささか懸念がないわけではない。もっとも、ブロツキイはあくまで「私人 частный человек」を標榜していたのだから、彼の実家が公営ではなく「私設博物館 частный музей」となることは当然の帰結だったのかもしれない。いずれにせよ、開館したあかつきにはペテルブルグの新名所になるだろう。

最後に、ブロツキイが珍しく「ムルジ邸」を題材にした詩行を挙げておこう。1961 年前半に執筆された 3 部構成の長編詩「ペテルブルグ物語 Петербургский роман」の第 1 部の第 7 章から一部抜粋する。当時ブロツキイはまだ 21 歳の新進詩人だった。

Меж Пестеля и Маяковской

стоит шестиэтажный дом.

Когда-то юный Мережковский

и Гиппиус прожили в нем

два года этого столетья.

Теперь на третьем этаже

живет герой, и время вертит

свой циферблат в его душе.²⁴

ペステリ通りとマヤコフスキイ通りの間に

六階建ての館がたっている。

そのむかし若かりしメレシコフスキイと

ギッピウスが今世紀の

二年間、暮らした建物。

三階にはこんにち主人公が

住んでいる、そして時間がみずからの文字盤を

²⁴ Сочинения Иосифа Бродского в 7 томах. Т. 1. СПб., 1997. С. 52. 和訳は筆者によるものである。

竹内 恵子

彼の魂のなかで回している。²⁵

²⁵ なお、ブロツキイの作品中に描かれたレニングラード（ペテルブルグ）や「ムルジ邸」に関する史実はしばしば間違っているので注意が必要である（詩行中にはメレシコフスキイとギッピウス夫妻が邸内に「二年間」暮らしたとあるが正しくない）。ミリチクは「ブロツキイはレニングラードの街歩きが好きでこの街の様々なエピソードに詳しくだったが、よく間違っていて覚えていた。でも当時は、今みたいに郷土史研究が盛んな時代ではなかったから仕方がない」と弁護している。Интервью с Михаилом Мильником // Полухина В. Иосиф Бродский: глазами современников (2006-2009). СПб. 2010. С. 46.